

シカゴ・レクリエーション運動における アメリカナイゼーション —プロテスタンティズムとセツルメントを中心に—

川口 晋一*

小論は、シカゴ・レクリエーション運動に「アメリカナイゼーション」の機能が存在したことを検討しようとするものである。初期の運動は、キリスト教的慈愛に基づき、万民のためのレクリエーション発展に貢献したとされる。しかし、実際は背景にプロテスタンティズムのより多様で複雑な力が働き、セツルメントの活動はアメリカナイゼーションの方向に導かれていった。合衆国に根を張ったプロテスタンティズムをめぐる富裕層、中産階級の保守層、そして民主的な革新主義者・シカゴのセツルメントのリーダーたち、そしてソーシャル・ゴスペラーたちは時代の流れの中で移民労働者たちとどのような関係にあったのか。小論では、実証は後の課題としつつ、まず「金メッキ時代」と「革新主義時代」のプロテスタンティズムを矛盾と対立という視点で捉え、問題解決のための移民労働者へのソーシャル・ゴスペラーの接近がどの様になされ、セツルメントという先端の現場で、そしてシカゴのコミュニティで結果的に何が起こっていたのか、という順番で論じた。

キーワード：レクリエーション、アメリカナイゼーション、プロテスタンティズム、ソーシャル・ゴスペル、セツルメント、金メッキ時代、革新主義時代

はじめに

合衆国シカゴで大きく発展したレクリエーション運動は、アメリカナイゼーション、すなわち移民労働者のアメリカ社会・文化への適応、アメリカ人化の機能を負っていた。この特徴を浮き彫りにして行くには、3つのレベルの研究が必要と筆者は考えている。その一つ目は、合衆国の成り立ちそのものに深く関わるプロテスタンティズムが、シカゴのコミュニティとセツ

ルメントの在り方を規定し、レクリエーションの意味や価値を外的に規定する、外的環境といえるレベル、二つ目は、セツルメントが実際に現場で何を考え、どのようなレクリエーション・プログラムの提供を行ったかという、実践レベル、そして三つ目として、最終的にシカゴ市議会がセツルメント他のボランティアな運動をどの様に引き取り施策化していったか、という行政レベルの問題である。小論は、この一つ目のレベルについて論じようとするものである。これは見方を多少変えるならば、レクリエーション発達の原動力となったシカゴ・セツルメントを規定する要因の研究であり、なぜ多文化共生

*立命館大学産業社会学部准教授

でなくアメリカナイゼーションに向かったのかという問題の追及である。従って、レクリエーション運動史の研究という位置づけでありながら、レクリエーションの枠組みがどの様に社会文化的な要因によって決定されていくのかというところに焦点付けされており、レクリエーションそのものについては扱っていない。

一般的に言われるところのセツルメントの活動は、キリスト教の博愛主義に基づいたスラムの改善とされ、その目的に沿ったレクリエーションのプログラムは、万民のための健全な活動の端緒として捉えられている¹⁾。そこでのレクリエーションが貧困層の生活を豊かにしたことは否定すべくもないが、それが手段として採用されていること、そしてそこに至る過程について、これまでの研究では全く問題にされてこなかったと言って良いだろう。とは言え、合衆国およびシカゴの動向が、如何にしてセツルメントにアメリカナイゼーションとしてのレクリエーション・プログラムを採用させるに至ったのかという問題を、段階を踏まずに一気に論じることは不可能である。それは、全ての原動力となったと言える、プロテスタントに関わる研究が十分になされていないと考えるからである。小論で、いわゆる「金メッキ時代」「革新主義時代」を通して現れてくる問題とプロテスタントとの関係を論じていくことで論証できることは限られていると思われる。しかし、歴史的事実を積み上げ、それを基に相互関係や規定要因を探っていくことが最も重要で、特に、ソーシャル・ゴスペルと労働者・労働運動を関連付けていくことによってセツルメントとアメリカナイゼーションの問題を考えるための課題を見出すことは可能だと考えている。

1. 合衆国のプロテスタントイズム

キリスト教のアメリカ的特徴

合衆国の起源はピューリタンによって築かれたアメリカ植民地から始まり、その土台を基に入植が拡大し1776年に政治的に独立した。この独立を宣言した国民の75%が道徳的・宗教的にピューリタンの背景を持っていたと言われ²⁾、その後、実質的なヘゲモニーはプロテスタントが握ることとなった。

そもそも合衆国におけるキリスト教プロテスタントの発展は、デノミネーション（教派）の歴史に特徴を持って現れているといわれる。「強いて言えば、それは、同じ目的を持つ個人から成る自然的共同体³⁾」であり、ヨーロッパと違って国家から切り離された世俗的な法人団体であり、そのためプロテスタント諸派が数多く存在していながらもそれぞれは分派ではなく、異なる教義を有して共存してきたのである。そして、それは一つに統合されていないが故に、常に自らの教義・信仰を伝え、会員を獲得していくために大衆的に伝道する「自由」を特徴として備えることとなった。この「自由」は福音伝道における2つの動きを作り出した。

一つは、合衆国のキリスト教諸派の構成が、政治的な領土の拡大および鉄道網の発達と産業化の進展などの経済的要因、またヨーロッパ移民の移入に関わる事情や特性によって、移入時期や移植地が大きく変わり、その勢力分布や布教活動に地域特性をもたらしたことである。もう一つは、教会に縛られない「自由」の中で、伝道の自由と自由な伝道は、感情に訴える劇的スタイルと効果をもたらしたことである。その結果として、ローマカトリックと違って「神の

王国（千年王国）」の考えが鮮明になったといえる。つまり大衆伝道において新約聖書の黙示録が、回心する個人の生きる「社会」との接点において劇的な効果をもたらしたのである。その解釈の違いにより、終末すなわちキリストの再臨まで、改革努力を重ねるか、現状をありのまま受け入れるか、何れにしても人々の感情を揺さぶる伝道がなされていたのである。

デノミネーションというそれぞれの教義を持つという特徴がありながら、その違いを超えて、ほぼ福音主義的な統一があったことも重要な事実である。そのことについて、山本は以下のように述べている⁴⁾。

19世紀前半のアメリカの宗教や文化は、1795年から1835年にかけて続いた「第二次大覚醒」(the second great awakening)の下、かなりの程度までリバイバリズムによって形成された。この時期の福音主義者の大半が、人間の改革努力を通して近い将来アメリカの地で「千年王国」が設立され、その「後」にキリストが再臨する、という「後千年王国説」(postmillennialism)を信じた。1857年から58年の都市リバイバルにより後千年王国説的希望が高まる中始まった南北戦争は、福音主義及びアメリカ文明にとって「黙示録的」抗争となった。

アメリカ合衆国の「自由」の背景には常にプロテスタントの自由が根底に存在しており、このことが後に見るように、福音主義における解釈の違いが生み出す複雑な過程を経てコミュニティの分断に繋がっていくのである。

シカゴにおける教会および神学校の歴史

南北戦争が終結した頃、既にフロンティア・

ラインは大陸のほぼ中央、ミネソタ州の西、カンザス州からテキサス州にかけての南北のラインに達していた。特に東部地域から教会拡張の任務を負っていた宣教師は、既に中西部で多くの教会を建設するまでになっていた。

シカゴは中西部の発展とともにキリスト教伝道の戦略的展開・発展のセンターになっていたと言って良いだろう。既に1850年代より力を持ったプロテスタントの神学校がシカゴ地域にいくつも存在していた。それは、メソジスト⁵⁾のギャレット聖書学校 Garrett Biblical Institute、会衆派のシカゴ神学校 Chicago Theological Seminary、長老派教会・マコーミック神学校 McCormick Theological Seminary of the Presbyterian Church (サイラス・マコーミック Cyrus McCormick⁶⁾の多大な寄附により、長老派・北西部神学校から改称)、バプテスト・ユニオン神学校 Baptist Union Theological Seminary などであった⁷⁾。

一方、会衆場所としては、1865年、シカゴ市では監督教会派 the Episcopal、会衆派 Congregational、新旧長老派 New School and Old School Presbyterian などの教派が、町の大通りに面して教会を構えていた。教会数においては、29あったこれらの教派教会のうち20は中産階級および富豪の居住地域に、しかし、貧困層の移民によって構成される居住地域には、僅かに2つしかなかった。教会の会員の数という点においては、アメリカ生まれのプロテスタントであるメソジスト派とバプテスト派が多くを占めており、1870年に至ってもまだ数で大きく上回るといった傾向にあったが、教会の立地が示していたように、実権は長老派と会衆派が握っていた。また、アメリカ生まれのプロテスタントは人口比に見合った増加でなかったが、ルタ

一派⁸⁾は大きく数を伸ばしていた。そのルター派は、ローマカトリックと同様に、外国人居住者の会員数を増やしていたというのが実情であった。これは、全国的な特徴としても現れていたが、とりわけ1840年代から50年代にかけてドイツ系、スカンジナビア系の移民がシカゴで定着し、後続のための地盤を築いていたことと関係があったと言われている⁹⁾。

南北戦争後、南部を国内の植民地とした北部資本は、既に1870年代初頭には膨大な富の蓄積を達成していた。この時期、1871年にシカゴは大火によって大きな被害を被っている。教会は空間的・物理的に会衆場所の確保に困難を抱えていたが、それがシカゴに特徴的な状況を作り出すことになった。ジョン・D・ロックフェラー John D. Rockefeller¹⁰⁾ やマコーミックといった富豪が、1872年の経済不況以来、財政的に困難な状況下で支援を行い慈善家（フィランソロピスト）として名を上げており、教会に対しても莫大な献金・寄附を行い、プロテスタントの神学を保守的なものに押し止めた。つまり、その経済的成功と慈善的な活動は、社会進化論を補強する役割を果たしていたと言える。この時期は進化論を否定していた教会がそれを取り込み始めていた時期でもあったが、次第に慈善活動が活発化する中で、富豪の徳を、そして働けず富も得られない労働者の不徳を説くようになっていた。シカゴは再開発が急速に進み、建物の近代化や急激な人口増加が起こり、そのことによって、生活の激変が古い伝統的な価値観の揺らぎをもたらした。特に教会およびその教義の質的な変化が迫られたが、その様な中で更に悪循環の原因を作り出したのはプロテスタンティズムそのものだったといえよう。何よりも富の集中が劇的に起こったことが、労資の問題

においてシカゴを極めて深刻な状況に置いた訳だが、この富の集中を支え、それにお墨付きを与えて加速させてしまったのが福音主義者たちであったことは特筆すべきである。既に1873年には、横暴な収奪によって、労働者の低賃金・長時間労働から莫大な利潤が生み出され、更に拡大された事業に投下されたため、ついには需給のバランスと限界を大幅に超えて恐慌となって現れた。この恐慌は更に小財産所有者同士の競争と巨大トラストを生成させると同時に、その過程で大量の失業者を生み出し、およそ6年間続くこととなった。シカゴでは1873年と1874年に2万人の失業者が街頭行進を行っている¹¹⁾。しかし、この中産階級同士の潰し合いによる社会的地位の変動は、少なくとも体制的な福音主義に潜む内部矛盾を顕在化させ、現状の体制ついでの見方を変化させることに繋がっていったと言える。

覚醒運動とソーシャル・ゴスペル

1870年代はいわゆるソーシャル・ゴスペル Social Gospel と呼ばれる、社会的キリスト教 Social Christianity の運動と、信仰復興をもたらした第三次大覚醒 Third Great Awakening¹²⁾ が起こった時代である。この二つが、矛盾を孕んで激しく揺れ動く社会、そしてある種の危機意識を背景に持っていることは改めて述べる必要もないだろうが、この両者は全く違ったものであり、キリスト教福音主義における変化の現れと捉えることができよう。

シカゴにおける大覚醒の中心人物はドワイト・L・ムーディー Dwight L. Moody というカリスマ的存在の大衆伝道者であったが、彼は1863年にシカゴにおいて超教派の教会を設立した後、1866年にはシカゴ YMCA の会長を務め、

移民の子供たちのためとして日曜学校を設立したりもしている。彼は、神学的には完全な正統派であったとされる向きもあるが、「神の愛」の名の下に霊的な働きを熱く説く中で大量の回心者を生み出す背景には、回心者の立場や感情を巧みに利用していたことが見受けられる。例えば、富豪に対しては、魂を救済するために「慈善活動」の一環として信仰復興運動への出資を促している。資本家は自ら慈善事業を行う時、様々な社会的批判をかわし、社会的地位を正当化したいという思惑があろうが、ムーディーはこれをうまく「救い」と結び付けたと言える。更に経営者の頭の中には、労働者がムーディーなどのリバイバル運動によって回心すれば、労働紛争も自ずと解決するという目算もあったと言われている。山本は、ムーディーが基金集めの手紙の中で資本家に向けて「都市労働者の福音化ほど資本家にとってよい『投資』はない」と訴えた事を紹介している¹³⁾。ムーディーは、この様に当時の独占資本と庶民・労働者の間に大衆伝道という形で入り込み、「仲裁」というよりは両者を巧みに利用した、誤ったやり方で福音を進めたと言える。その結果として、当然ながら両者の間に存在する矛盾に働きかけることなど出来なかった。そして、それは社会を変えていこうという考えでなく、現世が亡びるのに備えようとする前千年王国説を人々に広げることの一役買ってしまった。因みに山本はこのムーディーの大衆伝道を現代のキリスト教原理主義＝ファンダメンタリズムの源流として捉えている¹⁴⁾。

このように社会の民主化にとって障害となった信仰復興運動に対して、ソーシャル・ゴスペル運動は、民主化に貢献するものであったと言える。信仰は社会生活を営む人間が持つもの

であるから、個人の中に育った信仰によって自分や他人の振る舞い、またそのおかれた状況、環境、そして社会などに目が向けられることは当然のことである。そういったことからすれば、プロテスタントがそれまで全く社会に目を向けていなかったとは言えないだろうが、合衆国特有のデノミネーションにおける社会とは、先に見た同質のコミュニティを意味しており、外界や異質な他者に目を向けることはほとんどなく、神と個人の間には存在する愛や来世における魂の救いといった信仰の在り方が最も重要なものであった。そのようなプロテスタンティズムに、「社会的キリスト教」という新しい認識が芽生えたのは、やはり「金メッキ時代」のことであった。その起源を特定することは難しいと思われるが、1859年にダーウィンの『種の起源』が出版されてから、合衆国ではウィリアム・G・サムナー William Graham Sumner が社会ダーウィニズム論を展開するが、その動きに呼応するように社会的キリスト教の概念も進化している。しかし、科学的思考の導入＝民主的とは限らず、時代状況を反映した反動的で、体制的なプロテスタンティズムの動きとして注意して見なければならぬところがある。それは、体制的な教会のなかに、ムーディーのように実業家の成功を「神の御心」として賛美し、それに取り入る様な動きがあったことである。しかし、社会的キリスト教の中でも牧師・知識人層を中心に展開していたソーシャル・ゴスペルの運動が、徐々にだが教派の壁を越えて広がり、正当性を得ていく中で、体制的なプロテスタンティズムは変化していくこととなった。1870年代に誕生した社会的キリスト教の運動が、ある程度統一されたソーシャル・ゴスペルとして定着するまでには、従ってかなりの時間

を要していることを忘れてはならないだろう。ここで、合衆国のプロテスタントが多様な側面を持ち、ソーシャル・ゴスペルも一様のものでなかったことを捉えて、佐藤が以下のように述べていることを紹介しておこう¹⁵⁾。

そもそも社会福音自体がまとまりを持った団体や組織によって担われた一貫性を持つ活動として始められたわけではなく、特に19世紀中に関しては様々な思想、目的を持った人々の雑多な活動の集積を分析的な視点から社会福音として纏め上げたという側面が強い。その後次第に主要なプロテスタント教派や1908年に成立する教会連合会議(Federal Council of Churches)と呼ばれる超教派組織の中に教会と社会問題を結び付ける専門の部門が設置されることで社会福音は制度的基盤を獲得する。しかしそれ以前の社会福音は、地域や教派やその他様々な団体ごとに行われるローカルな活動という面が強かった。社会福音という名称にしても20世紀になって漸く定着したものであり、それ以前は社会的キリスト教(Social Christianity)、キリスト教社会主義(Christian Socialism)など多様であった。

ソーシャル・ゴスペル運動のリーダーたちは、ワシントン・グラッデン Washington Gladden¹⁶⁾を始め、既に1870年代よりこの言葉を使用しているが、筆者は、この佐藤の考えがより現実に近いソーシャル・ゴスペルの実態であったと考える。ホブキンス¹⁷⁾はこの運動の時代区分を以下のように示しているが、それが纏められ、保守的なプロテスタントイズムを大きく揺り動かし、社会を変えるような力を持つようになるのは1890年代前後かと思われる。

1865年-1880年：社会的キリスト教の誕生

1880年-1890年：一つの若い運動

1890年-1900年：成年に達した社会福音

1900年-1915年：成熟と公認

特に、この社会的キリスト教の誕生から、若い運動にかけて、つまり金メッキ時代のソーシャル・ゴスペルについては研究者の立場によってかなりとらえ方が違ったものとなっていると言えよう。いずれにしても、この運動がその後のシカゴに大きな意味を持って来るのである。

2. 労働移民とプロテスタントイズム

新移民の流入とプロテスタントイズムの変化

1870年代、福音主義プロテスタントイズムの保守化によって資本主義的な矛盾は解決されず、長引く不況で労働現場の状況は更に悪化し、暴動は避けられないものとなっていた。これに対して、経営者たちが警察やメディア権力を自分たちのものとし、失業者を扇動する者を外国人の共産主義者だと煽り、労働者の集団行動を暴力で潰すのが常となっていた。その陰にプロテスタントイズムが存在していたことは否定しようがない。一方、労働者がストライキや暴動に参加する行為にキリスト教的信仰がどの様に関わっていたのかはまだ十分に分からないといえる。少なくとも労働史家のガットマンは、そこに神によって祝福された労働運動への参加を見ているが¹⁸⁾、ここではそのことをこれ以上は議論しない。さて、1877年の鉄道大ストライキ Great Railroad Strike of 1877は、実際に賃金を巡る争いであったが、「それ以上に不況の象徴であり、アメリカ人民の怒りの象徴だった」とボイヤーとモレーズは述べている¹⁹⁾。

これに対して、保守的なプロテスタントは、体制を防衛するために共同戦線を張ったと言われている²⁰⁾。実際、この鉄道の拠点に飛び火したストライキでは、それを阻止するために恐ろしい殺戮が行われることとなった。もとはと言えば、賃金カットに理由などなく、むしろ高額な鉄道運賃に対して、起業家たちでさえ憤慨するという状況があり、警察・民兵にも同情的なムードが流れていたという。その様な中で、地区管轄の州兵さえそれを鎮圧することを望まなかったケースに、他地区管轄の州兵や連邦軍が初めて送り込まれ、労働者を数多く殺害する極めて残忍なことが起きている。このことが経営者・資本家に警察・民兵・州兵へ頼ることの危険性を認識させ、労働運動に対する締め付けを更に厳しくするきっかけとなった。この事件でそこまで残忍なことが正当化された背景には、くり返しになるが、プロテスタント的な後ろ盾があった。しかし、1880年代から1890年代にかけてソーシャル・ゴスペル運動が成長し、プロテスタンティズムの中に大きな変革の兆しが見えてきたのは、この様な事件を経て、その内的な矛盾および権力の労働者に対する残忍な行為が顕在化したからに他ならない。

さて、1880年代の終わりのシカゴでは、メソジスト派の会員が人口増加の比率を上回って増えていたが、キリスト教プロテスタントの中では、他の教派に比してルター派がドイツおよびスカンジナビア系移民に起因して数的に突出するようになっていた。また、カトリック教会も1890年までに移民会員の増加で、ローマ Roman・東方婦一教会 Uniates 合わせて262,047人を数えていた。そして、シカゴは合衆国で2番目に大きいカトリックのセンターとなっていた。更に重要な事実、それが他の7つの主要

なプロテスタント教派のいずれに比べても2.5倍以上会員が存在していたことであろう²¹⁾。因みにシカゴの人口は1880年がおおよそ50万人、1890年で100万人である。

このような状況に先駆けて、シカゴにおけるプロテスタント諸派が、超教派および組織的な慈善活動を強めていたことは特筆すべきであろう。バプテスト派は1882年にバプテスト・シカゴ市伝道協会 Baptist City Mission Society of Chicago の活動を通して、会衆派は1883年にシカゴ都市伝道協会 Chicago City Missionary Society を作り、メソジスト派も同様の活動を強化していた²²⁾。これらの教派の派生的組織はそこで採用された実践的なプログラムを通じて、物理的にそして精神的に人々に訴えかけていった。特に宗教的な意味においては、対カトリックという状況の中で、プロテスタント教派の活動は、拠点であるシカゴにおいて最も強化されたといえよう。これは純粋なプロテスタントの福音伝道と捉えることが出来る一方で、対立の構図を浮かび上がらせるものであったと言えよう。

資本と教会が結び付き、プロテスタントの政治的な力が強まる一方で、富の集中によってもたらされる厳しい労働者の状態と、そこから生み出される都市の社会問題は、神学校における教育に新しい動きをもたらすようになっていた。それは、1880年以降、教育の内容に社会的なものが持ち込まれるようになっていたことである。具体的な社会状況が取り上げられるようになる中で、神学校では、将来指導者・牧師としての役割が期待される学生を中心にソーシャル・ゴスペルが広く行き渡る環境が整備されたと言えよう。最も早いところで、1890年にシカゴ神学校社会学部が作られている²³⁾。そし

て、1892年には第4会衆派教会 the Forth Congregational Church の牧師であったグラハム・テラー Graham Taylor を招聘し、キリスト教社会学の専門を制度的に作り上げている。また、同年バプテスト神学校がシカゴ大学と合併し、社会学という学問に力点を置くようになっていた²⁴⁾。この様に神学校および各教派の神学は、現実をどの様に捉えるかという側面から科学を導入し、変化した。この制度化はいち早くシカゴで整備されたが、それは社会科学の進歩ということと同時に、プロテスタンティズムが抱える矛盾を解決しようとするものであったと言うことができよう。

労働紛争の激化と新しい兆し

シカゴ市は、産業の膨張と人口の拡大の中で、1890年には市域を1871年の大火時の約3倍にまで拡張し、メトロポリスを形成するに至った。従来、熟練労働者や職人がニューヨークやボストン、フィラデルフィアに比べて少なかった上に、急激に工業化を促進させたシカゴは、結果として膨大な数の不熟練外国人労働者を呼び込むことになった。そして、シカゴに暮らしていた中産階級の家族は、中心街への外国人労働者の流入によって外側に押し出される形になり、居住空間は更に分離傾向を強めた。

特に、1880年代以降その傾向は強まるが、そのような中で1893年の恐慌時までに最大の問題であったのがやはり失業問題であった。不熟練労働者が多数流入したことで、低賃金の貧困層が拡大したばかりでなく、常に労働力が置き換え可能な状態に保たれ、経営者が労働者組織から阻害されていた黒人労働者を巧みにスト破りに使い、労働者が団結するのにより困難な状況が作られてしまった。この状況は、労働運動の

指導者たちをシカゴに向かわせる要因にもなり、闘争を益々厳しいものにした。1879年から回復していた景気は1883年から85年にかけて再び恐慌の状態に入り、賃下げからストライキという波が常態化し流血は絶えなかった。1877年の鉄道大ストライキ以来、各地の州兵は新式の武器と兵器庫の大規模化によっていっそう武装強化していたが、既にイリノイ州兵も労働者を殺していた²⁵⁾。ヘイマーケット事件 Haymarket Affair に関与したとされ後に死刑となったアルバート・パーソンズ Albert Parsons は、既に1873年には妻のルーシー Lucy と共にシカゴ入りしており、その鉄道大ストライキに参加し、集会で演説した廉でブラックリストに載せられていた。そして、シカゴに居留することで生命の危険に曝されると再三指摘されながらも、彼は労働運動発展のためと、この地に踏み留まり、1886年5月4日のヘイマーケット広場 Haymarket Square の集会で演説を行っている。ハル-ハウスが作られたのはこの時から3年後の1889年であった。

1893年の恐慌は、それまで合衆国が経験した最も激烈なものであったと言われており、失業推定者数は450万人に達した²⁶⁾。その様な状況の下、同93年6月20日には、合衆国初の産業別労働組合、アメリカ鉄道労働組合 American Railway Union = ARU がシカゴで産声を上げている。しかし、翌94年にはプルマン・ストライキ Pullman Strike に関与する中でこの組織も骨抜きにされてしまった。シカゴ南部のプルマン会社²⁷⁾ は寝台車の製造だけでなく、鉄道会社でもあるとし、その労働者の待遇改善に ARU が指導に入り、最終的にプルマン車両運行のボイコットが敢行された。しかし、経営者団体はプルマン車両と郵便列車を連結させる戦略によ

り、ARUの行為を合衆国郵便に対する妨害に該当するとして連邦政府を介入させ、彼らにとって脅威となる産別組合に致命的なダメージを与えることに成功した。独占を規制するために、既にシャーマン反トラスト法が1890年に制定されていた。しかし、その法を基に、労働組合のストライキが「取引制限」に触れると判決を下されたこと、イリノイ州知事の承諾を得られなかったにも拘わらず連邦軍のシカゴ駐留を認める道を開いてしまったことなど、この事件と裁判の持つ意味はたいへん大きく、労働者たちから希望の光を奪い取るに等しかった²⁸⁾。児玉が、ヘンリー・F・メイ Henry F. May を取り上げ、ソーシャル・ゴスペルの形成において1886年のヘイマーケット事件 Haymarket Affair, 1892年のホームステッド・ストライキ Homestead Strike, 1894年のプルマン・ストライキが教会に与えた衝撃が決定的に重要だったことを紹介している²⁹⁾。テラーはその1894年に新しくセツルメントを作っている。

革新主義とソーシャル・ゴスペル

1890年代の「革新主義時代」に入り、ソーシャル・ゴスペル運動と革新主義運動が、目に見えてではないが労働者の状態に変化をもたらすべく発展を続けていた。

「革新主義」は、それが必ずしも一つの思想あるいは運動として括ることが出来ないというのが共通した認識である。この時代の改革を促進した動きの背景には独特の政治思潮が存在したと言われているが、それは特定化できる一つのイデオロギーによって牽引されたものでなく、その質や内容において相互に矛盾するものが多数存在しており、活動も運動も極めて複雑なものであったという認識である。紀平は、こ

の時期の経済・社会環境の変化と自らの知識や職業に関わって、中産階級出自の若者が敏感な感性を持っていたところを改革的意識の主たる要因として見ている³⁰⁾。そして合衆国に伝統的に培われてきた個人主義によって周りの動きに不干渉という行動様式が存在した一方で、秩序を持つ社会関係へ回復させようとする、同質的なコミュニティ回復への関心が強まっていたという³¹⁾。実際、工業化による社会の急激な変化によって、「金メッキ時代」に生きた人間のほとんどは、過去と進行中の現実の狭間で自分の居場所を見つけれなかったという。

他方、成熟期に入っていたソーシャル・ゴスペル運動は、これまでも見てきたように、既に20年ほど激動の時代と共に積み上げられてきたものであった。後に見るように、90年代の終わりには、かなり具体的な社会改良の提案を示すに至っている。この歴史の中で、それが革新主義と相互に影響しあったことはたいへん大きな意味を持っているだろう。両者の関係については、今後更に詳細に検討が進められるべきと考えるが、「ソーシャル・ゴスペル（社会的福音）は、アメリカ革新主義運動の精神的風土の重要な部分として、これと相互に影響しあったと考えるのが一番妥当なようである³²⁾」と述べている児玉から学び、ここでは両者の共通点を簡単に押さえておきたい。

児玉は、要するに著名なソーシャル・ゴスペラー³³⁾として、ワシントン・グラッデン、リチャード・T・イリー Richard T. Ely³⁴⁾、ウォルター・ラウシェンブッシュ Walter Rauschenbuschに見られる特徴から、世俗的な革新主義者との共通点・相違点を見ていこうとしている。3人のソーシャル・ゴスペラーの中でもグラッデンは中道で、幅広い性格をもっており、その様な

彼を中心に問題を捉えていると言っただろうが、簡潔に纏めるならば以下のようにソーシャル・ゴスペルを押さえている。すなわち、ソーシャル・ゴスペラーは現世で神の国を実現するという目的のために、すなわち完成に近づくように日々進歩の意識を持って努力すること、そのために個人が協力し合い、統一的な社会を実現させること、また社会的人間の存在を神の意志として認めることである。革新主義者のほとんどが背景としてプロテスタンティズムを持っていたことを考えると、彼らの運動がソーシャル・ゴスペルと対立する理由はどこにもなく、むしろ共鳴しあっていたと考えるのが自然であろう。そして、この共鳴によってプロテスタンティズムは、漸く外の社会に開かれたりベラルなものに変化したと言えよう。特に、児玉が簡潔にソーシャル・ゴスペラーに共通する13の項目として抽出しているものの中で、ここで特に重要と思われるのは、11項目目の「真の親労働的態度」と12項目目の「平和主義」である³⁵⁾。この二つの間には、労働者の側に立ちながら、労働者の団結や団体交渉権、そしてストライキについてどの様に考えるのかという重要な問題が依然として残されている。労働者が団結することによって起こりうる労働放棄や結果として起こる労使の衝突や暴力など、プロテスタンティズムとしては憂慮すべき問題が残されていたと言えよう。児玉は「労使双方が平和的に和解し、互いの立場を認めて『労使協調主義』などを実行に移す方がもっと望ましいと説いていた」としてそれをグラッデンの思想をよく反映したものだとしている³⁶⁾。しかし、当時の状況からすれば、ストライキを積極的に認めるか否かが真に親労働者かどうかを決める重要な判断材料になったであろうし、逆に労働者が

ソーシャル・ゴスペルやそれを背景に持つ社会改良運動を受け入れ可能かが決まってきたであろう。

だが残念なことに、ソーシャル・ゴスペルの研究では、当時の運動が実際に労働者にとってどの様なものであったのかといったことは問題にされておらず、また階級的視点が弱いとも言えるだろう。つまりソーシャル・ゴスペル運動を、それが広く社会そして労働者階級に影響を及ぼすようになっていったという表層的な部分でしか捉えていないのである。そういった点に注目するならば、直接労働者との接点が見えないソーシャル・ゴスペル運動に対して、社会改良主義者を通して現実にどの様な役割を果たしていたかを見ていくことが、極めて重要な課題として浮かび上がってくる。この様な論理からすれば、ソーシャル・ゴスペルを背景にもっているセツルメントの労働者への対応は極めて重要なものとして考えることが出来るであろう。

3. セツルメントと労働移民

ソーシャル・ゴスペルと労働者

メイは、教会が外の世界についてどの様に捉えていたか、そしてそれがどの様に変化していったかについて述べているが、それはたいへん興味深いものである。また、メイがホブキンスと違い、ソーシャル・ゴスペルを「進歩的な社会キリスト教」と考え、社会に目を向けながらも古い制度にとらわれた段階（ホブキンスはこれを初期のソーシャル・ゴスペルと見なしている）を「保守的な社会的キリスト教」と考えているところも、労働者とプロテスタンティズムの接点を考える上でたいへん参考になるものであると筆者は考えている³⁷⁾。

ソーシャル・ゴスペル運動の組織的な動きと、労働者のストライキの関係については更に慎重な検討が必要と思われるが、時期としては兎玉が紹介しているように³⁸⁾、「米国福音同盟 Evangelical Alliance of the United States」が全国から多数参加の下に1887年、1889年、1893年にソーシャル・ゴスペルのための会議を開き、その中でも1893年の会議にはグラッデンやアダムズなどが参加する中で「方法としての隣保館、スラム改革、制度的教会」などについて議論されていることは特に重要と考える。また、1900年設立の「クリスチャン労働者と教会の全国連合会 National Federation of Churches and Christian Workers」がソーシャル・ゴスペルと労働者を結び付けるものとして、更にそれが「アメリカキリスト教会連合協議会 Federal Council of the Churches of Christ in America」(= FCCCA)として宗派を超えて社会問題を解決していこうとした活動は重要であろう。FCCCAは、1908年にその第1回集会を開いているが、この集会には「アメリカ労働総同盟 American Federation of Labor」(= AFL)のヘイズ副会長も臨席し、相当な数の労働者を開催地のフィラデルフィアに集めていたようである。そのFCCCAのシカゴで開催された1912年第2回全国集会で採択された綱領は兎玉が紹介している³⁹⁾。そこに見られる16項目は、(1)完全なる正義と平等なる権利、(2)家庭の保護(特に各州同一の離婚法や適正な住宅計画によって)、(3)あらゆる児童の可能な限りの最大の発達(特に適切な教育、娯楽の提供によって)、(4)児童労働禁止、(5)婦人の労働条件改善の法的制定、(6)貧乏の減少と予防、(7)禁酒、(8)健康の保持、(9)労働者の、危険な機械や職業からくる病気、死からの保護、(10)万人の自活の

保障、失業保険、(11)労働者の老齢年金、災害保険、(12)労働争議の適切なる仲裁と解決のための手段として、被雇用者も同じく組織化する権利、(13)一週六日制(つまり安息日の確保)、(14)労働時間の可能な限りの減少、(15)あらゆる産業における最低賃金制と各産業が可能な限りの高賃金、(16)財産の獲得と使用に対するキリスト教原理の適用、生産物の最も公平な分配、である。ここには、労働者の組織化の権利といった重要なことが書き込まれていると同時に、その他、労働基準として基本的に重要なものはほとんど盛り込まれている。ただ若干注意深く見なければならぬのは、安息日や禁酒と書き込まれているような分かり易いものだけでなく、児童や婦人、そして家族に関わる事柄は、当然ながらその背景にプロテスタント教義との関わりで理解しなければならないということ、そしてその様なものを全てを含めてプロテスタントイズムの倫理に則ったコミュニティづくりが想定されていることであろう。さらに教育については、義務教育の徹底化すなわち英語使用の法制化などは、すぐに行政と結び付くものもあり、更に注意する必要があるだろう⁴⁰⁾。因みに、財産や生産に関わる最後の項目を見ても、キリスト教原理といったものを見直しを、プロテスタントが収奪に荷担した以前の経験から、厳格に行おうとするところが窺える。

テラーのシカゴ・コモンズ

さて、シカゴにおいてソーシャル・ゴスペルはどの様に展開したのか。社会的キリスト教あるいはキリスト教社会主義といった、広義あるいは制度の枠に収まらないものまで取り扱うことはできないが、ひとまず教会を中心に、布教活動や新たな組織によって社会に認知されるよ

うになった運動として考えるならば、シカゴにおけるソーシャル・ゴスペルは、先に見たシカゴ神学校が起点となって、グラハム・テラーを中心に、またジェーン・アダムズを媒介して拡大発展していったと言えるであろう。そして、ソーシャル・ゴスペルは1900年代と1910年代にその最盛期を迎え、全般的に革新主義の精神的土壌として生かされたという側面が強かった。しかし、具体的な労働者に関わる提案は、特にセツルメントによって生かされ、更に「精神的」以上の働きをしたと考えることが出来るのではないだろうか。以下、そのことについて見ていこう。

セツルメントとソーシャル・ゴスペルの関係をより深く捉えていくためには、今後研究を積み重ねていく必要があると思うが、ここではグラハム・テラーの経歴や活動、また人的な繋がりなどをまず見ていくところから始めることとしたい。グラハム・テラーが牧師をしていた第4会衆派教会は、東部コネチカット州・ハートフォードにあったが、彼はそこで神学校の教鞭も執っていた。彼が中西部のイリノイ州・シカゴに呼ばれたのは、先に見たようなシカゴにおける教派の状況やカトリック移民の増大によるプロテスタントの布教活動ということが当然ながらあったであろう。しかし、シカゴ神学校において社会学部が作られ、そこで講座を担当することになった事実からも明らかであるが、布教活動の基盤には教会と社会という実践的問題が想定されていたことも確かであろう。実際、ハートフォード時代の彼は、急激な都市化に対応できずに居場所を失った信者や、アルコール依存など、これまでプロテスタントが悪として見放していた問題に取り組み、大きな成果を残すことで会衆派教会の間で評判にな

っていた。従って、必ずしもソーシャル・ゴスペルをキリスト教社会学の中身として教えるのではなく、将来のキリスト教社会を担う若い学生たちに、現実社会に生きる人々との様に向き合っていくのかを教えることが想定されていたと言えるだろう。実際、彼は救いと罪は個人の問題ではなくコミュニティの問題であること、そして教会の機能が、教会以外のいかなる集団や制度、すなわち生活の全てをキリスト教化して神の国を作り上げるところにあるという、言わばソーシャル・ゴスペルの信条そのものといってもよい内容で日々の教育実践を行っていたのである⁴¹⁾。

彼が1894年にシカゴ・コモンズ Chicago Commons というソーシャル・セツルメントを立ち上げ、家族と学生で住み込み、長期に渡って活動するようになったのは、社会的正義を説くだけでは自らのなすべきことが十分でないと考えたからである。テラーはシカゴ・コモンズにおいて、ハル・ハウスのジェーン・アダムズとお互いの親交を深めながら、共に厳しい貧民街に身を置きながら実践を行っていた。

シカゴ・コモンズはハル・ハウスより5年遅れて1894年に立ち上げられたが、恐らくシカゴでの活動の実績は同等あるいはそれ以上で、現在でも継続されているセツルメントである。それは当時の行政区第17ワードに居を構えたが、テラーはまず学生たちと探索した後地域に決定を行っている。更に、第17ワードに決定した後、この地区に学生のための小部屋を用意し、彼らに地域の教会や宗教、健康や衛生面、政治構造や移民の家族と公立学校の関係について調査研究をさせるという綿密さを見せている。調査研究の結果、そこは28,000の人口に対してアメリカ生まれは半分に満たず、ドイツ、

スカンジナビア、そしてアイルランドからの新移民の人口がたいへん多く、一応中流と見なされながらも、その下層に当たるプロテスタントという特徴を持ち、そして家族世帯が多く、英語でコミュニケーションが取れることが分かった。テラーは家族世帯の多さおよび英語が使用できることがセツルメント活動にとって有効であるとし、最適な場所として決定に至っている。このことから、テラーが事前にどのような活動を展開していきたいのか方針を持っていたことを窺い知ることが出来ると同時に、この地を中心にコミュニティをキリスト教的に作り替えていくことを念頭に置いていたことが容易に想像できる場所である。これが正にアメリカナイズーションそのものであったと筆者は考えている。地域が確定した後、彼は適当な賃貸物件を探し、家族が入居し、更にセツルメントとして住民が集えるスペースを有するユニオン通り Union Street の大きな家と最終的に1894年に契約した。また、翌1895年には第17ワードにおいて初となる遊び場を、小さな裏庭を片づけて作っている。これは、幸せや健康のためというよりも青年や大人たちの興味関心を広げるための教育的な意味が大きかったとテラーは述べている⁴²⁾。近くに公立の小学校が2つあったが、どちらも子供が遊ぶための屋外施設はなかったようである。その後、1901年にはグランド通り Grand Avenue とモーガン通り Morgan Street の角に体育館や講堂、多目的ルームを有する5階建ての建物を建設し、そこに移動している。そして暫くして、その向かい側に大きな建物二つ分の土地を借り受け「最初の本場のプレイグラウンド」を作っている。このプレイグラウンドは第17ワードで唯一のプレイグラウンドであった⁴³⁾。

ソーシャル・ゴスペルとセツルメント

さて、シカゴ・コモングスの活動としてここで注目しておきたいのが、一週間に一度行われていた「フリー・フロアー・ミーティング Free Floor meeting」という、事前にフロアーから提案されたテーマで講師を決め、20分ほどの講演を行ってもらい、フロアーからの質問やコメントで自由に討論するというものである。大変好評で、階級に関係なく多くは第17ワードの住民、そして外からも多くを集め、常時講堂に200～300人を集めており、その関心の高さを物語ると同時に、セツルメントが多様な思想や運動を繋ぐ場であったことが分かる。この企画はシカゴのデイリー・ニュース Daily News 紙が広報に協力し、講師はソーシャル・ゴスペルのリーダーであったライマン・アボット Lyman Abbott やワシントン・グラッデン、進化論裁判で有名なクラレンス・ダロウ Clarence Darrow、オハイオ州トレド市長「ゴールデン・ルール」のサミュエル・M・ジョーンズ Samuel M. Jones⁴⁴⁾、アナキストのエマ・ゴールドマン Emma Goldman、社会主義者で労働者のリーダーのトーマス・J・モーガン Thomas J. Morgan、またパーソンズの未亡人ルーシーなど、驚くべき顔ぶれを揃えていた。

テラーのソーシャル・ゴスペルの考え方が厳密にどのようなものだったかをここで明言するまでには至っていないが、彼とグラッデンはお互いに尊敬しあっていたことは見て取れる⁴⁵⁾。この点から、テラーは社会主義的な考えは持っていなかったと言えるだろうが、リベラルな協調主義者の側面を持っており、労働者の現状をありのままに受け取っていたことは間違いない。また、彼は決してアナキストとされる人々や、社会主義者、そして労働組合や労働運動家

に対して差別的な態度は取っておらず、アダムズと同様に労働運動による抵抗やアナキストなどの活動について、暴力は否定しつつも、彼らの人権が法によって守られることを主張し、権力に対して声を上げていた。そのために、シカゴ・コモンズとハル－ハウスがアナキストや社会主義の組織であるとレッテルを貼られたこともあった⁴⁶⁾。

党派的・政治的な活動をセツルメントが行うことに対しては根強い反対があり、例えばボストンのサウス・エンドハウス South End House やニューヨークのグリニッジ・ハウス Greenwich House はそれに反対の立場を取っていた⁴⁷⁾。筆者はこのことについて、それがセツルメント・リーダーの個人的な方針や見解ということというよりは、むしろそれを決定する以下のようなセツルメントを規定する要因によるものであったと考えている。それは、セツルメントとソーシャル・ゴスペルとの関係がどのようなものであったか、当地での労働運動やアナキズムの現れ方がどのようなものであったか、また当地での産業や労働の質によって労働者大衆がどのような状態にあり、そしてコミュニティで労働者の生活がどのように営まれ、それをセツルメントのリーダーたちがどのように捉えていたのか、という4点ほどである。

さて、労働者とソーシャル・ゴスペルを直接的に結び付ける研究の成果が見られない中で、グラッデンの提案を頼りに、また労働運動など労働者の団結の状況からセツルメントとソーシャル・ゴスペルの結び付きについて若干ではあるが考えてみよう。

グラッデンが、政府のなすべき事柄として『道具と人間』（1893年）および『社会の事実と力』（1897年）において提唱している20におよ

ぶ項目を原典ならびに児玉を参考にして紹介する⁴⁸⁾。

(1)最も地位の低い、貧乏な、弱い市民を援助・保護すること、(2)公明正大な正義の実現、(3)独占体の抑制、(4)すべての市民に平等な機会を与えること、(5)工場・鉱山などの衛生検閲、(6)労働者の健康と安全の保障、(7)日曜労働の禁止、(8)酒場と売春の禁止、(9)労働時間（特に婦人・子供の）の短縮、(10)労働争議の調停、(11)鉄道・電信・電話など、すでに独占化され、しかも公共性の性格をもつ事業の国有化、(12)個人が所有できる土地の制限、(13)より重い相続税と、累進所得税の賦課、(14)義務教育の確立、(15)失業者・貧民・犯罪人・博徒などを減少させる法律・制度の制定（以上、『道具と人間』より）、(16)職業安定所の設立、(17)3才以下の子供を持つ婦人と、児童労働の禁止、(18)会社が富を社会全体の利益のために正しく管理できない場合、会社に対し厳格な監督を実施し、更に全ての会社に営業内容を公表させること、(19)牢獄の改善、(20)都市の更生（以上、『社会の事実と力』より）

この様にグラッデンは、彼自身のソーシャル・ゴスペルを確立しつつあった時期（革新主義時代に入ってから）、既に政府の立法や政策に影響を与えるような提言、更にある種社会主義的な部分も含みながら、より広範な改革主義者・社会改良主義者と共鳴できるようなものを作り上げていた。このことは、彼がアメリカ経済学会 American Economic Association⁴⁹⁾ との関わりがあったにせよ驚くべき事実である。

ソーシャル・ゴスペルが多く of 具体的提言を行うようになり、それは単に慈愛を基礎とした

精神的支柱というよりは、セトルメントにとってより戦略的なものとして重要になった。逆に見れば、セトルメントという組織における実践的な展開があって、初めてソーシャル・ゴスペルは実質的に教会や宗教の枠を離れて労働者と接点を持つことが出来たと言えよう。

一方で、同時期に、中産階級による慈善活動が活発化している。これは、プロテスタント内での移民労働者に対する捉え方の違いと密接に関わることであったが、一般的には慈善組織協会運動 Charity Organization Society Movement⁵⁰⁾ (= COS 運動)として捉えられるもので、セトルメントとは袂を分かつたものであった。COS 運動は、言わば社会問題の根本に迫ることなく、効率的な対処療法を行おうとするもので、集団およびコミュニティの問題を改善することはなかった。

このように、表面的にはキリスト教的慈善として捉えられるものも、内的には移民労働者の問題に大きな矛盾を抱えていた。そういったことが、シカゴが都市として飛躍的に拡大・拡張する世紀転換期において、実質的に空間的に顕著な形で現れてくることとなったのである。これはいくつもの分離・独立したプロテスタントのコミュニティが労働移民から距離を置いて作られたことを指している⁵¹⁾。棲み分けとして、単に外側に押し出されたという問題ではない、より複雑な関係をそこに見ることができる。

ここで重要なのは、宗教的な意味や文脈、キリスト教における矛盾・問題といったことではなく、プロテスタンティズムの精神を中心に形成された合衆国・シカゴが、そのことを根底に持ちつつ、どの様な特徴を持ったコミュニティを形成していったか、また、独立したコミュニティ同士はどの様な関係にあったのかというこ

とである。また、セトルメントのリーダーたちが実践しようとしていたレクリエーションのプログラムが、そのコミュニティおよびその相互関係をどの様に捉えたものであったかということである。政治的に独立したシカゴ内のコミュニティでは、それぞれ独自のレクリエーション施設やプログラムが作られていった⁵²⁾。それは正に自律したシステムの中で生きるためであったが、ではセトルメントで行われていたレクリエーションは単に外国人労働者の健康を守り、彼らが少ない自由時間を楽しむためのものであったのだろうか。それは恐らく、レクリエーションにコミュニティを形成する機能を、更にコミュニティを超えて人々の間で機能する何かを期待して行われていたはずなのである。

まとめにかえて

小論は、シカゴ・レクリエーション運動のアメリカナイゼーションの問題を浮き彫りにするという目的で、それが3つのまとまった研究により完成するという考えの基、その一つめの課題を、合衆国プロテスタンティズムとセトルメントの展開を軸に論じてきた。その中で主に、プロテスタンティズムの特殊性と資本蓄積の関係性やプロテスタントの教派的展開と独自のコミュニティ展開の関係性について触れてきた。このことで、セトルメントが単に慈愛の精神によって貧民労働者に対してレクリエーション（勿論その他の取り組みの方がむしろ数多く行われているが）を提供してきたのではなく、むしろスラム街が顕著な形で現れ、他方では教派や民族ごとに独立したコミュニティがシカゴにつくられる環境の中で、移民労働者を救済する手段の一つとしてレクリエーションを考えてい

ることが見えてくる。そこでは、移民労働者がアメリカ人および市民としてシカゴの中で調和し、さらに合衆国全体の改革と改善なくしては根本的な問題解決が望めない状況にあったからである。従ってセツルメントがそこに至る過程は、合衆国のプロテスタント主義の歴史的特性を踏まえるならば、運動方針と言うよりはむしろ必然であったといえよう。合衆国では、レクリエーションは必然的にアメリカナイゼーションの特徴を備えるものとなって発展することとなったと言えるのではない。

小論の課題は、セツルメントによって提供されていたレクリエーション・プログラムがアメリカナイゼーションの特徴を持っていることを外的な環境から迫るところにあったので、そのことにはある程度成達できたのではないかと考えている。筆者は別の論文で、既にシカゴのノースウェスタン大学セツルメントで行われていたレクリエーション・プログラムの中にチャールズ・ズウェブリンによるアメリカナイゼーションの意図について指摘しているが、そのことの裏付けとしても成果があったのではないかと考えている。レクリエーションとアメリカナイゼーション研究の序論であるとの位置付けから、小論は、最後に一つの例を紹介することで次につなげ、「未完」として筆を置きたい。リヴカ・リサク Rivka Lissak がハル-ハウスの神話と現実をテーマに記した論文⁵³⁾によると、ジェーン・アダムズはユダヤ人やイタリア人をアメリカ市民として教化するために、戦略的に娯楽やレクリエーションのプログラムを捉え、様々な工夫を凝らしていたことが見て取れる。次は、具体的にシカゴ・コモンスやハル-ハウスのレクリエーション・プログラムの実践を実証的に積み上げていきたい。

註

- 1) 例えば、岸野雄三・小田切毅『レクリエーションの文化史』不昧堂出版、1972年、pp.204-207.
- 2) 蓮見博昭『宗教に揺れるアメリカ』日本評論社、2002年、p.11.
- 3) S. E. ミード『アメリカの宗教』日本基督教団出版局、1978年、p.200.
- 4) 山本貴裕「ファンダメンタリズムと金びか時代のアメリカ文化」、広島大学『欧米文化研究』第1巻、1994年、pp.1-16.
- 5) プロテスタントのメソジスト派のこと。もともと国教会の支脈としてイギリスで発足し植民地に渡ったものだったが、独立革命以後、アメリカの教会として、開拓者精神を支える福音主義的信仰をもって再組織化され、初期の布教は改宗ではなくむしろ空白を狙って巡回説教師派遣を中心に行われた。G. R. スチュアート『アメリカ文化の背景』北星堂書店、1955年、p.62. 参照.
- 6) マコーミック収穫機会社 McCormik Harvesting Machine Company の創設者。彼の発明した自動刈り取り機とその集中管理された製造工場であるマコーミック・リーパー・ワークス McCormik Reaper Works は、シカゴの工業化、産業発展の象徴であった。ここの熟練労働者解雇を巡って続いていた争いに警察が発砲し、死者が出た事件に抗議するために持たれた5月4日のヘイマーケット広場での整然とした集会在、何者かの爆弾テロによって血に染まることになった。
- 7) バプテスト派の神学校。バプテスト派は、純粋にアメリカ生まれのプロテスタントと考えられている。メソジスト派同様に、独立革命後急速に勢力を伸ばしたが、布教は主に農園説教師の派遣によって行われた。組合派や長老派の会員を改宗させようとするものではなく、メソジスト派同様、空白を狙っていた。その神学は、神と個人の直接的な繋がりを強調したものといえよう。スチュアート、前掲書、p.63. 参照.
- 8) 日本ではルーテル教会と呼ばれている、キリスト教プロテスタントの一教派。1517年ルター

- の宗教改革によってドイツで生まれ、ドイツ・北欧を中心として国民的な教会として位置付いた。合衆国には上に示した国を中心とする移民と共に持ち込まれた。
- 9) シカゴにおける神学校および教会の歴史については Pierce, Bessie Louise, *A History of Chicago, Volume III, The Rise of a Modern City, 1871-1893.*, the University of Chicago Press, 1957, pp.423-466 (第12章宗教と博愛主義的奮闘) を参照している。
- 10) 実業家。事業拡大と企業合同を繰り返し、トラストとしてのスタンダード・オイル Standard Oil Company を作り、石油王という異名を取った。1870年代終わりから80年代初めには90%を越える独占の状態に入っていた。強いバプテスト信仰の基に生きていたと言われ、1890年にはシカゴ大学を創立した。
- 11) 津田真澄『アメリカ労働運動史』総合労働研究所, 1972年, p.73. また、1877年には、失業者は全国で300万人に達していたとわれ、更に就業労働者の賃金は45%も切り下げられていた。こういった状況の中で、全国的な労働組合はロックアウト、ブラックリスト、告発・スパイによって多くが潰された。当時成長しつつあった「労働騎士団 Knights of Labor」はやむなく地下に潜ることになった。以上、R. O. ボイヤーと H. M. モレーズ『アメリカ労働運動の歴史 I』岩波書店, 1958年, p.57.
- 12) 大覚醒は、合衆国で時代の状況や信仰の状態に合わせて繰り返し起こされている運動と思われるが、この第三次の運動は、1870年代から20世紀初頭までというのがおよそその共通理解である。
- 13) 山本, 前掲論文, p.7.
- 14) 同上論文, p.5. ここでは、ソーシャル・ゴスペルが20世紀アメリカの宗教や文化における「主流」の形成に寄与したのに対して、ファンダメンタリズムが「底流」作りだし、主流の道徳的権威が危機に瀕すると、ファンダメンタリズムが浮上するといった、たいへん興味深いことを指摘している。
- 15) 佐藤清子「合衆国における社会福音—メソヂイスト監督派教会ディーコネスの活動からの考察—」『東京大学宗教学年報』第24巻, 2006年, p.99. また、この論文ではソーシャル・ゴスペルを社会福音と翻訳している。他では社会的福音とする場合が多く見られる。
- 16) Gladden をグラドンと表記する場合が数多く見られるが、ここではグラッデンとする。
- 17) ソーシャル・ゴスペル研究において最もよく知られた著作であろう。C・H ホプキンス (宇賀博訳)『社会福音運動の研究』恒星社厚生閣, 1979年. Hopkins, Charles Howard, *The Rise of the Social Gospel in American Protestantism 1865-1915.*, Yale University Press, 1940. では、社会的キリスト教とソーシャル・ゴスペルは明確に区別されたものではない。訳者である宇賀も同書の解説において、歴史的に区分された1870年代から世紀転換期までの特定時期の社会的キリスト教の運動をソーシャル・ゴスペルとしている。
- 18) ハーバート・G・ガットマン『金びか時代のアメリカ』平凡社, 1986年.
- 19) ボイヤーとモレーズ, 前掲書, p.105.
- 20) 山本, 前掲論文, p4.
- 21) Pierce, 前掲書を参照している。
- 22) 同上
- 23) Pierce, 同上書, p.455.
- 24) 同上
- 25) ボイヤーとモレーズ, 前掲書, p.113.
- 26) 同上書, p.218.
- 27) Pullman Inc. ジョージ・M・ブルマン George M. Pullman が創設した株式会社。1867年には、ブルマンズ・パラス・カー・カンパニーを立ち上げ、イリノイで認可されている。彼は、この豪華寝台列車を製造する工場のためにブルマン・タウンを作り、労働者を住まわせた。そこでの低賃金と高い生活費がブルマン・ストライキの引き金になっている。
- 28) 山口房司「ギルテッド・エイジにおけるブルマン・ストライキについて—ボイコット, 連邦介入, 州主権の問題—」『史学』第59巻, 第1号, 1990年, pp.1-31.
- 29) 児玉佳与子「アメリカ革新主義の精神的風土

- 一ソーシャル・ゴスペルにおけるグラドンの役割—』『史林』第49巻, 第3号, 1966年, p.92.
- 30) 紀平英作「革新主義的政治統合の軌跡」歴史学研究会編『危機と改革』(南北アメリカの500年 第4巻)所収, 青木書店, 1993年, pp.164-5.
- 31) 同上, p.166.
- 32) 児玉佳与子「ソーシャル・ゴスペルと革新主義」関西アメリカ史研究会編著『アメリカ革新主義史論』小川出版, 1973年, 所収, p.162.
- 33) ソーシャル・ゴスペル運動は, キリスト教の知識人や牧師など, 指導者層を中心として牽引される性格や特徴が主であるため, 彼らをこの様と呼ぶようである.
- 34) 児玉は, Ely をイーリと表記しているが, ここではイリーとする.
- 35) 児玉, 前掲書, 1973年, p.164.
- 36) 同上, p.166.
- 37) May, Henry F., *Protestant Churches and Industrial America*, Harper & Brothers Publishers, 1949.
- 38) 児玉, 前掲論文, 1966年, pp.96-7.
- 39) 同上, p.103.
- 40) 竹田有「合衆国メトロポリスとエスニシテイ, 人種, 階級」歴史学研究会編『19世紀民衆の世界』(南北アメリカの500年 第3巻)所収, 青木書店, 1993年, p.224-6.
- 41) ハートフォード時代のテーラーについては, Wade, Louise C., *Graham Taylor: pioneer for social justice, 1851-1938* (第2章 *The Urban Apprenticeship*) を参照.
- 42) Taylor, Graham, *Chicago Commons: through forty years*, Chicago Commons Association, 1936, p.57.
- 43) シカゴ・コモンス時代のテーラーについては, Wade, 前掲書 (第5章 *Chicago Commons*) を参照.
- 44) 1846年ウェールズ生まれ. 1849年に両親と共に合衆国に移住した. トレド市長に立候補するに当たって, いわゆるキリスト教の黄金律「己の欲するところ人にもこれを施せ」を掲げて1897年に当選. 1904年まで市長を務め, 革新主義者として労働者のための市政改革を行った.
- 45) グラッデンは, テーラーが早くからソーシャル・ゴスペルに転身したことに関わって, 彼が生活を彩るために宗教があるのではなく, それが生全の全てであることを発見し, 宗教の真実から全く目を背けることなく, 強調点を生活に移したとして高く評価している (Wade, 前掲書, p.225.). また, テーラーは, 自身の編集する *The Survey* においてグラッデンが亡くなる直前に, 彼の功績を讃える論考を掲載している (Taylor, Graham, *The Survey*, vol.39, October, 1917-March, 1918, p.111.).
- 46) Wade, 前掲書, p.135.
- 47) 同上書, p.129.
- 48) 児玉, 前掲書, 1973年, p.168.
- 49) 自由放任経済批判のもと, イリーが中心的な役割を果たす中で, グラッデンもそれに加わり, 1885年に創設された.
- 50) 日本では, 慈善組織化運動, 慈善組織化協会運動とも訳される. この運動は, 組織化によって貧民救済を効率的に行おうとしたが, 被救済者の減少を追求し, 労働者のストライキ, 失業を, 道徳観から浪費・怠惰と考え, 根本的原因究明は避けた.
- 51) 例えば, シカゴのオーク・パーク Oak Park について竹田が分析している. 竹田有『アメリカ労働民衆の世界—労働史と都市史の交差するところ—』ミネルヴァ書房, 2010年, pp.343-352.
- 52) 筆者は, これを独立小規模公園行政区の問題として別の著作で取り扱っている. 拙稿「合衆国における公的レクリエーション運動とその主体—シカゴ市の都市的拡大と市民・行政の多様な実態—」有賀郁敏・山下高行編著『現代スポーツ論の射程—歴史・理論・科学—』文理閣, 2011年, 所収 pp.296-318, を参照されたい.
- 53) Lissak, Rivka, “Myth and Reality: the pattern of relationship between the hull house circle and the ‘new immigrants’ on chicago’s west side, 1890-1919”, *Journal of American Ethic History*, winter 1983, vol.2, issue 2, pp.21-50 を参照されたい.

参考文献

- 宇賀博『アメリカ社会学思想史』恒星社厚生閣, 1990年.
- 川田壽『アメリカ労働運動史 上巻』勁草書房, 1955年.
- 佐々木隆・大井浩二編『史料で読む アメリカ文化史 3 都市産業社会の到来 1860年代—1910年代』東京大学出版会, 2006年.
- 清水博編『アメリカ史 (新版)』山川出版社, 1969年.
- 曾根暁彦『アメリカ教会史』日本基督教団出版局, 1974年.
- 歴史学研究会編『近代化の分かれ道』(南北アメリカの500年 第2巻) 青木書店, 1993年.
- チャールズ・ビーアド／メアリ・ビーアド／ウィリアム・ビーアド『新版 アメリカ合衆国史』岩波書店, 1964年.
- C. A. ビアードとM. R. ビアード『アメリカ精神の歴史』岩波書店, 1954年.
- J. C. ブラウアー『アメリカ建国の精神 宗教と文化風土』玉川大学出版局, 2002年.
- M・カーチ『アメリカ社会文化史 (中巻)』法政大学出版局, 1956年.
- M・カーチ『アメリカ社会文化史 (下巻)』法政大学出版局, 1958年.
- サムエル・モリソン『アメリカの歴史 第2巻 (1815-1900年)』集英社, 1971年.
- Barbuto, Domenica M., *American Settlement Houses and Progressive Social Reform: an encyclopedia of the American settlement movement.*, The Oryx Press, 1999.
- Gladden, Washington, *Tools and the Man*, the Riverside Press, 1893.
- Gladden, Washington, *Social Facts and Forces*, the Knickerbocker Press, 1893.
- Taylor, Graham, *Pioneering on Social Frontiers*, the University of Chicago Press, 1930.

A Study of Chicago's Recreational Movement and Americanization : issues concerning Protestantism and Settlement.

KAWAGUCHI Shinichi *

Abstract: This essay discusses the topic of whether the recreational movement in Chicago played a role in “Americanization.” The early years of the recreational movement led by settlement, is recognized as a matter of Christian philanthropy, and the outcome is evaluated as it contributed to the development of recreation for everyone. However, the fact was that Americanization was the only way for relief, and that recreation had been programmed as the method of Americanization. Settlement leaders in Chicago, who were also Social Gospelers and Progressives, had been, in the process of the Era, facing the immigrant workers who were forced to become Americanized in order to live with harmony in the community, under the various and complicated power of the wealthy and middle-class, rooted in American Protestantism. Although proof should be established at some stage in the future, this essay developed the topic through argument on the contradiction and antagonism of Protestantism through the “Gilded Age” and “Progressive Era,” firstly how Social Gospelers approached immigrant workers for problem solving, and finally, what happened through settlement, as the forefront, and in the communities of Chicago, as a consequence.

Keywords: Recreation, Americanization, Protestantism, Social Gospel, Settlement, Gilded Age, Progressive Era

*Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University